



# Marine Festival 91

2位  
10票

## ELLIOTT 7M



ケンウッド・カップでの「E」クラスメーカー、オーランド・福岡での「ウエーチャー・ショック」とその驚くほどのスピードで日本でもすでに有名な「ノン・OR」の鬼才といわれるグレッグ・エリオット。その彼が今まで所蔵していたエリオット・ヨット社から独立してデザイン会社を設立、福岡のウィンズによって建造されたこのボートが独立後最初のプロジェクトである。シンプルな機装、バックステイなしのリーグでデインギー感覚のキールポート。船体重量600kgはトレイラーと合わせて750kg以下なら普通免許で牽引できること。内装はシンプルなものだが、バルクヘッドがないので広々としている。全長をめいばい生かした水線長、クリーンなハルラインが生き出すスピードは速さを求めるセイラーたちの期待に充分応えるであろう。●価格465万円●問い合わせウィンズ 092-883-2250

### 話題のニューモデルに人気集中!

アンケートのなかで「どの艇が一番良かったですか」という質問を設定し、クルーザーを選んでもらったのだが、残念ながら半数近くの方が、憶えている

ない、よくわからないという答えだった。またなかにはヤマハとだけ答え、どの大きさのフネかを聞いてもよくわからないというのもあったが、ここでは、艇が限定されていない回答については無回答として処理している。

「今年もそんなに変わらばえしないね」などという声も多かったが、ベスト7に入った艇を見てみるとオリジナリティの強いフネが人気を集めている。1位になったニュージラランド大使館プーアのファーマRXは、マッチレース用のシンプルで使いやすいデフキレイアウトということとレース志向のセイラーに人気があった。また、同時に行った出展会社に対するアンケートのなかでも他社の気になるフネとして名前が挙げられる回数も多く、その注目度の高さが感じられた。

2位のエリオット7Mが屋外プーアの一番はじというあまり良くない条件にもかかわらず、これだけの票を集めたのは、日本のマリナー事情に合わせた普通免許で牽引可能な重量、シンプルな機装、デインギー感覚に近い圧倒的な速さという新しいコンセプトがセイラーの共感を得たということではないだろうか。

この他、ヤマハのニューモデルIMS対応スポーツクルーザー31S、デザインにB・ファアとピニンファリーナというビッグネームを起用したベネットウ45F5、内装をより充実したエックスの412などが上位となったが、いずれも少なからず際立った個性をもった艇、あるいはニューモデルとなった

エックス412は、インテリアの居住性、美しさという点が一層強化され、これまでのエックスとは異なった味付けになっている。内装には初めてインナーモールドを使用しスツキリと明るい印象を与えている。デザインもいまままでに、曲線を多用したのとなつている。10Rにとわれないスムーズなハルは、アイビニセルのサンドイッチ構造、ボトムフレームとして、無鉛合金の強化樹脂フレームを敷き、キール、マストステップなどの強化を図るエックス独特のフネ造りは変わらない。●価格3990万円●問い合わせ先135イースト079713211350



3位  
B票

## X-412



4位  
7票

## First45f5

ハルのデザインにB・ファ、インテリアにはビニファリーナという寛大なとりあわせで、注目を集めたフランス、ベネット社のクルーザー・レーサー、45フィートというサイズは出展されたボートのなかでは最大、内装の美しさ、レーサー成績が物語る帆走性能に加えて、船内の床材に施した滑り止めや汚れやキズになる部分にアルミを巧みにデザインするなど、細部にまでフネを受するオーナーのためのアイデアが行き届いている。●価格6335万円●問い合わせ先ファーストマリーナ04681761771



## 30人乗りのパワーボートも

### 追いつけず

上り性能は決してあなどれない戦闘能力を持っている。これがフリーになると、とんでもない速さを見せつけることになる。9月30日の進水式は、台風の余波で風速15メートル、ブローで18メートル以上の条件下の荒れた海で迎えた。しかし「E-7」は上りでもおじぎすることなく、チョッピーな玄界灘の波の中を滑るように走り、一転してジャイブを返した後のスピランでは一気に加速した。そのときマスコミ関係者たちが観覧用に使



↑風速1~2m、微風時はスキッパーがコクピットに入るだけで微妙なヒールを調整できる。軽量艇ならではの楽しみかただ

っていた30人乗りのパワーボートがフルスロットルでも追いつけず、突き離されるという一幕があった。そのとき「E-7」のボートスピードは優に20ノット近く出ていたという。

戦歴としては、進水後の1週間につきつぎとレースに参加。まず広島市の福山市で行われた内海町長杯で池35, X99, J24, ネルソンマレック9.5m, 横山37など強豪をおさえファーストフィニッシュで優



勝。津で行われた全日本ミニトン選手権では正式参加は認められなかったものの、全艇スタート10分後にスタートを許されるオープン参加で、その後全艇を抜き去り、ファーストフィニッシュした時はミニトンのトップ艇の〈クリーク〉に70分の大差をつけるダントツの走りを見せた。

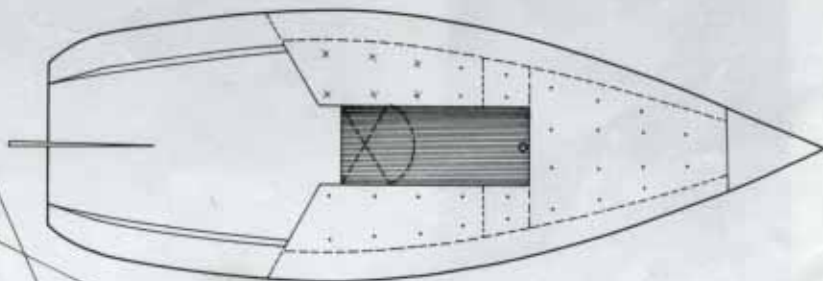
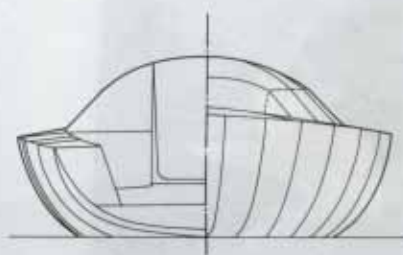
その後博多のNORC玄海支部のポイントレースであるオリンピックコースのレースに正式参加。半年前に進水した横山32など30フィート、40フィートのレーサーたちをおさえ優勝している。

↓吃水1.5mのバルブキール型センターボードがこの艇の強さの秘密。どんなに吹いても不安はない。センターボードを上げると、吃水は55cmほどになる。そのおかげで川や湖に入っていけるし、トレーラーに乗せることもできる



#### セール面積

メイン	18.20㎡
No.1ジブ	11.30㎡
No.2ジブ	5.90㎡
スピン(リーチ)	8.10m
(フット)	5.25m
総重量	600kg
構造	レッドンダーとFRPのサンドイッチ



価格.....450万円(消費税別)

## トレーニング艇だが

### 小旅行も楽しめる

しかし「E-7」は決して危険なフネではない。スピードが出るフネは危険と考えるのは早合点である。一度でもレーニングの経験を持つ人であれば、レーニング中のヨットがいかに安定しているかは理解できるだろう。風が7~8mもあれば、すぐにレーニングを始める「E-7」は、実にイージーで快適な走りを体験させてくれる。

「E-7」の建造目的の1つは、IORにとらわれないトレーニングポートであることだ。対象者は、ジュニアヨットスクールを卒業した若いセーラーたち、レーザなどエキサイティングなセーリング経験を持つディンギー乗りたち、特に熟年のセーラーたち、そしてヨットスクールを計画している人たちである。



もう1つの目的は、1泊2日~2泊3日の小さな旅ができるクルージングポートである。この2つの、一見相反する目的を兼ね備えているのが「E-7」である。だからキャビン内には4名分のスペースがある（プロダクション艇は6名分のスペース）し、コクピットは大きくとられて6~7人が楽に座ることができる。

→スピンの上げ下げはハウハッチからクルーが半身乗り出して素早く処理する。クルー1人分の重量かつワトリムをベストにする

→高めのドッグハウスも空気力学を考えたラウンド型でスッキリしている。中央の穴がセンターケース。機装は最低限度のシンプルなもの

↓荒れた海でもオープンランサムからは絶対に水は入らない。レーニングしているので艇は常に定位置にある



## いま新艇「E-9」を

### 開発中

基本コンセプトは、ニュージーランドで既にトレーニング用としてトップセーラーに使われているエリオット氏がデザインした5.9mポートである。

ただし、このフネのデザインは8年前にさかのぼる古いもので、エリオット氏はさらに高い水準の航走性能を持ち、一般の人に遊びも体験できる「E-7」の開発に着手したのである。

エリオットは今年の初め、それまで勤めていたエリオット・タイプ・ヨット会社を辞め、新たにエリオット・ポートデザイン会社というエリオット個人の会社を設立した。そしてプロジェクトのパートナーとして、日本の株式会社を選んだ。

現在、両社は次の新しいフネ、ニュー「E-9」(30フィート)を開発中である。

「E-7」はこれからルールの確定を急いで、ワンクラスポートとして育てられていく。一年以内に全日本選手権、2~3年以内にワールドの開催をエリオット氏は計画している。

問い合わせ先

株式会社 福岡市西区姪浜町550-1

tel 092-883-2250

Fax 092-883-4467



フレームレスの船体はウッドの持ち味の美しい。比較的広いスペースが確保されている。気になるセンターケースもプロダクション艇ではうまく処理され、大きさは1/3~1/4になる